

氏名	鹿住 輝之 (かすみ てるゆき)
学位の種類	博士 (文学)
報告番号	甲第613号
学位授与年月日	2023年3月31日
学位授与の要件	学位規則(昭和28年4月1日文部省令第9号) 第4条第1項該当
学位論文題目	キルケゴールのキリスト論：ハイペアとマーテンセンのキリスト論との関係で
審査委員	(主査) 加藤喜之 (立教大学大学院キリスト教学研究科准教授) 廣石 望 (立教大学大学院キリスト教学研究科教授) 久保田 浩 (明治学院大学国際学部国際学科教授) 鈴木 祐丞 (秋田県立大学総合科学教育研究センター助教)

# I. 論文の内容の要旨

## (1) 論文の構成

### 序論

第一節 本研究の方法論と目的

第二節 先行研究と本研究の独自性

### 第一章 三者の危機意識の基盤となったデンマークにおける国家とキリスト教の関係

第一節 デンマークにおける国家と宗教の結びつき

第二節 敬虔主義と啓蒙主義

第三節 自由主義の台頭

第四節 自由主義と農民覚醒運動とナショナリズムの結合

第五節 1848年の革命と信教の自由

### 第二章 ハイペアのキリスト論

第一節 ハイペアの生い立ちと問題意識

第二節 ハイペアの『現代にとっての哲学の意義について』：哲学と神学、芸術の関係

第三節 「ローテ博士の三位一体論と和解論への批評」におけるハイペアのキリスト論

### 第三章 マーテンセンのキリスト論

第一節 マーテンセンの生い立ちと問題意識

第二節 マーテンセンの受肉理解

第三節 マーテンセンの危機意識と教会論

### 第四章 キルケゴールのキリスト論

第一節 『イロニーの概念』におけるキルケゴールの問題意識

第二節 『あれかこれか』における思弁批判

第三節 『哲学的断片』と『後書き』でのキリスト教の思弁的解釈への批判

第四節 愛としてのキリスト論

### 結論

## (2) 論文の内容要旨

本論文は、キルケゴールのキリスト論を同時代のヘーゲル主義者であるハイペアとマーテンセンのキリスト論と比較考察するものである。ハイペアとマーテンセンの両者はキルケゴールの批判の対象と考えられてきたが、三者が価値基準の崩壊への危機感を共有したことが、昨今の研究により明らかになった。しかし三者の思想の中心であるキリスト論の比較研究はこれまで行われていない。したがって、本論文の目的は、キリストを再解釈することによって、瓦解しつつあったキリスト教国の価値観を再構築、さらには刷新しようとする三者の立場を明らかにすることにある。

第一章では、三者の危機意識がどのようにして生じたのかを見るために、デンマークでの国家と教会の関係について、宗教改革期から 1848 年の三月革命に至る過程を論じた。

第二章ではハイペアのキリスト論について論じた。ハイペアは青年期の悩みをヘーゲル哲学との出会いによって解決した。その鍵となったヘーゲルの無限理解が彼の後の著作活動の基盤となった。彼は自由主義運動を有限な人間の欲求のみに基づくものと見做し、そこには基礎となる無限なものが欠けていると理解した。彼はその解決をヘーゲル哲学の中に見出した。彼のキリスト理解はその枠組みの中で論じられた。

第三章ではマーテンセンのキリスト論を扱った。マーテンセンは汎神論と有神論の選択に悩み、バーダーの良心論に解決を見出した。それがその後の著作での彼の思想の基盤になった。マーテンセンは、神が良心によって人間の内で働き、歴史の中で自己を展開するという発展史観を説いた。彼のキリスト論は、この良心論をもとに展開されたものであり、キリストは神の働きの体現者として人々が従う理想と捉えられた。

第四章では、キルケゴールのキリスト論を分析した。彼の学位論文『イロニーの概念』は時代に蔓延するイロニー的な態度に批判を向けた。この批判を彼はハイペア、マーテンセンと共有し、彼らから多くの着想を得た。しかしその後の著作でキルケゴールは、ハイペアやマーテンセンの思弁的な世界理解にイロニーとの相似性を見出し、批判を向けた。キルケゴールは、模範および贖罪者としてのキリストが持つ二つの側面に着目し、キリスト論を構築した。キリストの愛は社会内で善とされた特定の価値づけから排除された個別性、すなわち罪に向けられるものと理解され、その模範に倣うことがキリスト教徒に要求される。しかし同時にキリストは、その要求の達成不可能性を告白した者に対し、その罪を赦す贖罪者の側面を持つ。

こうした比較により明らかになったのは、危機に対する共通認識にもかかわらず、三者のキリストに対する意味付けの相違である。ハイペアやマーテンセンは、キリストを理性の働きの体現者と解釈し、集団における規範的な役割を与えたのに対し、キルケゴールは、キリストを理性の働きとは別の次元で解釈し、贖罪者としての役割を重要なものとみなした。

## II. 論文審査の結果の要旨

### (1) 論文の特徴

本論文は、キルケゴールの著作と思想を当時のデンマーク社会が直面していた危機への応答として、その歴史的な文脈の中で分析したものである。当時の社会が直面した危機とは、キリスト教に依拠した絶対王政が政治的な自由主義や信仰覚醒運動、さらには哲学的な合理主義の煽りをうけて、弱体化したことであった。本論文は、こうした危機へのキルケゴールの応答を分析するだけでなく、これまで原典から読解されることの少なかった、ハイペアとマーテンセンという二人の同時代の哲学・神学者たちの思想的な応答と並列させて描き出すことで、彼らのキルケゴールへの影響と差異を明らかにした点が特徴的であるといえよう。なかでも三人のキリスト論に注目することで、これまで単純にヘーゲル哲学への応答とみなされていたキルケゴールのキリスト理解を、同時代のデンマークのヘーゲル主義者たちへの応答として読み解き、より歴史的に浮かび上がらせることができたのは特筆に値する。

### (2) 論文の評価

本論文の最大の貢献は、キルケゴールが影響を受け、また乗り越えていこうとしたハイペアとマーテンセンの著作を原典で精緻に読み解き、分析したことにある。彼らの思想については表面的には知られていたものの、本論文が達成したレベルでの分析は国内においてはいうまでもなく、国外においても類をみない。また、これまでの十九世紀西洋思想史研究ではあまり光の当てられてこなかった、キリスト論という主題に注目し、その全体像を浮かび上がらせたのも高く評価できる。

本論文のアプローチは先行研究における大きな欠落を十分に補ったものとはいえ、著者自身の独創的な視座からの思想史的な再構築はやや希薄である。また、ハイペアとマーテンセンの著作の精緻な読解という点は評価できるものの、あまり知られていない思想家たちの著作をわかりやすく詳述しようとするあまりか、彼らのテキスト内部に潜む矛盾点の指摘に関していえば、わずかながら不満が残る。キルケゴールのテキストの分析についても、「キリスト論」という主題に集中するあまり、彼の多様なテキストを同次元の「神学書」としてのみ平面的に分析する本論文の手法には再考の余地がある。

とはいえ、キルケゴールのキリスト論を同時代の思想家たちとの対話や比較のなかで精緻に読み解いていく本論文の学術的な貢献は重要なものであり、こうした理由から、本審査委員会は、本論文を学位に相当する優れた研究と認める。